特集 VIEW SPECIAL

illustration : Tanaka Yasuo

教師、かく語りき

今、生徒へ投げかけたい教師の思い

生徒の多様化、利己主義、教師間の連携など、今、学校には取り組むべきさまざまな課題がある。現場で奮闘する教師たちは、その問題をどうとらえ、対処しているか。6人の先生方に聞く。

私が思う学校の課題 1

無気力、無感動な生徒たちのやる気を掘り起こしたい

三重県・エスコラピオス学園海星高校・小津清貴

生徒の領域に入り込んで実態把握に努める

社会の変遷同様、生徒もずいぶん変わったと思う。昔に比べ自分の領域から出たがらない生徒が増えた。自分のことしか考えない利己主義、どうにかなると思っているなんとかなる主義、他人の声を聞き入れない自己評価主義などの性格の持ち主が蔓延(まん)している。

そんな彼らを教育し、指導するのが私たちの仕事だ。生徒たちの目線に下りて、教師と生徒の信頼関係を成立させることが、今要求されていることではなかろうか。生徒の領域に入ってしまえば、彼らの実態を把握でき、学習・進路指導の方向づけも容易になる。

興味の方向を探り生徒の関心を高めていきたい

ときに、生徒の間で話題となるテレビ番組や漫画、タレントなどの話も授業の導入に使う。そこから最近のニュースに絡んだ時事問題の話題へ話が広がることもある。話題は多い方がペースに引き込みやすい。そして、授業中の生徒個々の反応から、脈ありと見れば個別に語りかける。話が生徒の興味に触れれば必ず反応がある。その機を逃さず、そこからより深く興味の方向を広げられる働きかけをしてやりたい。

学習面でやる気を引き出すにも工夫が必要だ。問題を解かせる場合に、過去の入試出題率や、どんな形式で出されているかを一言加えると、授業への熱心さも変わる。結果、試験で1点でもよい点をとり学習に積極的な生徒が1人2人と増えれば、クラス全体が触発され、勉強しようという雰囲気が高まり、教師も断然教えやすくなる。

おづきよたか・昭和18年生まれ。担当教科は国語。現在、2学年主任。丁寧な指導と温かい人間関係の形成を心がけている。

教師と生徒との一線を守りながら殻の中に入っていく

私は自校の教えを誇りに思い、ロマンを持った、活力ある生徒に成長してほしいと願っている。だからこそ、生徒には厳しく接することもある。言葉遣い、挨拶(あいさつ)など、教師への態度に対しては厳しく指導しながら、生徒の価値観はしっかり認める。教師と生徒の一線を越えない適切な位置で、生徒と接することを忘れてはならないと思う。

福岡県立戸畑高校・村上典子

自分について話せる環境で主体的に進路を考えさせたい

今の生徒はよく、やる気がない、覇気がないといわれる。それは、私も学校現場に身を置く中で次の3点に如実に現れている、と感じている。

授業中の質問が少なく進路選択に悩む姿に生徒の変化を見る

第一に、授業中質問が出ないこと。あっても授業が終わってから。私が教師になったばかりの平成元年度は、生徒たちは授業中に大いに質問し、「勉強しよう」という意気込みが感じられた。

第二に、生徒は課題をこなすのに精一杯で、知的好奇心を満たすまでにいたらないこと。課題は授業の理解度を測る目安でしかない。自ら学び応用力を培う習慣は身についていない。

第三に、進路選択が心からの希望でなされていない場合が多いこと。そのとき人気のある学部を選ぶなど社会の状況だけに左右される生徒も多く見られる。模試の結果に一喜一憂し、大学、学部・学科をテスト結果で選ぼうとする生徒たち。大局的に自分の人生をとらえ、進路研究を重ね、希望の職業に就こうというチャレンジ精神を持ってほしい。

生徒の実態を把握し進路意識を高めながら将来を考えてほしい

では、教師としてそんな生徒たちをどう指導していけばよいのだろうか。

一つ目は、クラスだけではわからない、部活や家庭での生徒の実態を把握するよう努めること。そのために、生徒が自分のことを話しやすい雰囲気を作りたい。皆に公平に接し成績など一面だけで判断しないなど心がけている。

二つ目に、進路を主体的に選べる生徒育成をめざし、段階的な進路指導を行うこと。1年生は高校生活への適応、2年生は進路希望の明確化、3年生は進路実現に向けた実力養成という目標の実現をめざした指導をしている。

三つ目は、「人生において方向転換はいつでも可能である」と伝えること。今は物事を一面的にしか考えられない生徒が多い。希望する一つの道が閉ざされるとなかなか立ち直れない。それ以外の道も考えられる柔軟性が欲しい。

以前、生徒に個人目標とクラス貢献目標を書かせた。掲示することで、クラスに迷惑をかけられないという気持ちと連帯感が生まれた。また、クラスメートの長所を全員に書かせ本人に渡したときも、他人から評価されたことを励みにしていた。クラス全体を刺激し鼓舞する指導を心がけたいと思う。

むらかみのりこ・昭和37年生まれ。担当教科は英語。今年度は2年生の副担任。同校で英語を教える前は通訳、翻訳の仕事に従事していた。

私が思う
学校の課題
2

自由気まま、わがままな生徒たちを一つのクラスにまとめていきたい

いわもとまさあき・昭和35年生まれ。担当教科は英語。現在は1年生の担任。前任校では13年間生徒指導部。坂本龍馬の生き方にあこがれる。

私が心の支えとする先生は、ルアン先生（『ルアン先生にはさからうな』早川書房）とサッカレー先生（映画『いつも心に太陽を』）だ。この2人の先生には、生徒たちに自分なりのルールをはっきり示しクラスを運営したという共通点がある。

私は担任がルールブックであると考える。2人の先生のように、私もクラスの生徒に対して学期の初めや定期テストの前後など、節目をとらえてクラスの方針を重ねて確認し、こちらの方針を伝え理解させるようにしている。

締めつけず自信を持たせながらのクラス作りをめざす

集団行動ができない、わがままな生徒がいても、彼らを排他する環境に追いやってはいけない。我々は生徒を締めつけることを目的にしていない。ある生徒に注意を促すときも、いきなり呼び出すのではなく、まずは学年全員、クラス全員の前で呼びかけてから、個人的に声をかけている。今の生徒は必要以上に周りの目を気にしすぎる傾向があるので、配慮を心がけたい。

例えば、ルアン先生はクラスをまとめるために手紙を使った。何人かの生徒に、親への手紙を持たせた。生徒は手紙に叱責事項が書かれていると思ったが、意に反して自分をほめる手紙だった。ほめられることのなかった生徒たちは、その手紙で自信を持てるようになった。サッカレー先生のクラスも、博物館見学の外出許可を獲得したのがきっかけで団結していった。自分が認められていると感じさせるのは、非常に大切だ。私も面談の際には、必ず生徒の長所をほめるように努力している。

今の生徒を指導するうえで必要なのは、クラスをまとめる明確なルールと、長所を認め伸ばしていくことだと思う。

富山県立水橋高校・岩本昌明

担任は明確な方針をクラスに提示するべきだ

最近の生徒は多様化してきたといわれる。だが、本当にそうだろうか。私には、小中学校で躾けられず、叱られないまま野放図に年を重ねてきただけのように感じられる。子どもたちは、睡眠時間を除けば学校で過ごす時間の方が長く、教師の影響は大きい。特に担任が全教科を教える小学校では、生徒にとって教師は保護者の代わりともいえる。その教師は、体罰事件（あってはならないことだが）でマスコミなどからバッシングなどを受け、その結果、叱り方を忘れてしまったようだ。いや、叱ることを恐れているようだ。

また、生徒は善悪の区別、正義感、周囲への配慮なども欠如している。日常の提出物や清掃を見ても、人が嫌がることを進んで行う奉仕的精神が、今の生徒にはあまり感じられない。

生徒に対し教師から統一した基準を示したい

教師も多様化し、指導上の統一や共通理解が得られにくくなっているのも、生徒の多様化の原因ではなかろうか。教師1人ひとりが、あるべき価値観やものさしをしっかり携えることが今まで以上に要求される。小中学校で身につけるべき規範を教えられてこなかった生徒たちに接するとき、特にこれらは重要であろう。しかし、スカート丈一つにしてもそれぞれの教師の基準が異なれば、混乱するのは生徒たちである。学校全体では難しくても、せめて学年レベルで基準をはっきりさせておく必要があるだろう。本校でも、事あるごとに担任の集まる学年会で、共通理解を図る場を作っている。

宮崎県立延岡東高校・中岡陽一

人間関係を密にして自由、個性の意味を教えたい

現在、問題とされる生徒の行動は、元来尊ばれるべき人間の自由、個性を、好き勝手、わがままという言葉と同義に解釈していることが原因だ。人に迷惑をかけていないか、大半の生徒は自分の行動を振り返ってみることをしない。また、生徒は本当の意味で、自由や個性を求めて行動しているのかどうかも疑わしいと思う。

常にグループ行動だが生徒間の人間関係は希薄と感じる

最近の生徒にめだつことに、グループ単位の行動がある。例えば、授業中だれかが保健室に行くとき、必ずつき添いがいる。また、放課後、職員室に来る生徒にも連れがいる。つき添いの生徒はただ待つだけだが、別に時間がもったいないとか、待たされているという不平不満は持っていないようだ。本人たちはそこに友情めいたものを感じているのだろう。だが、プリクラの交換や携帯電話の番号の教え合いと同じで、常にいっしょに行動＝人間関係が濃密、とは限らない。逆に、今の生徒たちの人間関係は希薄と感じる。

このグループ行動が、自由、個性の価値判断を生徒1人ひとりが下せなくしている原因ではないか。生徒はグループ化することで仲間意識を保とうとしているが、それは仲間外れになりたくないためで、いじめという最悪の事態を回避するためのような気がする。

人とのつながりの大切さに気づくようしむけていく

私は、学校において生徒同士、教師と生徒の人間関係を密にすることが、自由を尊重し個性を伸長させることにつながると考えている。前述の保健室や職員室に来た生徒に次のように語りかけてみる。「きみは1人で保健室に来られないほどきついのかい？　友達は授業を二の次にしてきみのことを心配してくれているようだけど、どう思う？　きみが保健室にいる間、友達がしっかり授業を受けて、あとでいっしょに勉強した方がよいのではないかな？」この場合、つき添いの生徒が十分に心配していると伝えつつ、よりお互いのためになる関係を考えさせ、より人間関係が密になるように働きかけたい。職員室に来た生徒に対しては次のように話す。「外で待っている友達がいるようだけど、用事はないのかな。きみのつき添いのためだけに、大事な時間を使わせるのはもったいないのでは。待ち合わせ時間を決めるとよいと思うけど、どう思う？」ここでは、待たせている生徒が友達の自由を束縛していることに気づかせることが大切である。

今日、さまざまな形で生徒の行動に荒れた様子が見られる。いじめ、学級崩壊など、マニュアルや今までの教職経験では対処できない、人間対人間のぶつかり合いが繰り広げられている。以前、担任をしたクラスの生徒に「先生はクラスの鏡なんだよ。鏡が曇ったら、きれいに映らないよ」といわれたことがある。ちょっとした教師の迷いにも敏感に反応するほど、実は生徒は教師から影響を受ける。ならば、自由とわがままを履き違え、好き勝手な行動をとるような生徒に対してはなおさら、よいものはよい、悪いことは悪いと、毅然とした態度で指導しなくてはならない。これが教育の不易であろう。と同時に、生徒は元来よりよく生きようとしていることを忘れないでいたい。

生徒の人間関係を真の意味で密にするためには、教師の援助が必要になる。生徒と共感的理解を深めるため、「どうして……しないのか」という詰問調ではなく、「私は……と思う」という教師の思いを伝える根気強い指導が今後ますます大切になるだろう。すぐによくなるとは思わない。根気よく生徒の10年後のために指導していきたい。

なかおかよういち・地歴公民科で日本史と倫理を担当。生徒指導部所属のあと、現在2年生副担任。好きな言葉は「明るく、楽しく、美しく」。

特集
VIEW SPECIAL
教師、かく語りき

私が思う
学校の課題
3

多忙な学校生活の中で効果的に教師間で連携していきたい

おおだんのりゆき・昭和16年生まれ。地歴公民科（地理）担当。現在は1年生の担任。清掃を指導する清美係担当。好きな言葉は「献心」。

広島県立広島井口高校・大段徳行

教科間の垣根を取り払い協力し合える環境をめざす

与えられた授業時間では足りず、より多くの時間を確保するのに必死な教師は少なくない。そんな中で教科ごとのセクト主義が生まれ、模試の結果を他校とばかりでなく、校内で他教科の平均偏差値と比較するようなことが起きてしまう。同じ教科内で「A先生よりも自分の方が」という意識があり、それが「自分の教科はほかの教科よりよい結果を」と考える傾向につながっていると思う。世間や保護者が、教科内容をどのように教えているかでなく、生徒の平均偏差値（結果）で学校を評価するのも原因の一つだろう。

自分の教科の評価を上げようと、さらに単位数の増加や補習などに力を注ぎ込む教師たち。だが、一つの教科だけで生徒の学力を上げるのは無理な話だ。学力とは体力、精神力など含めた総合力であることをお互いに理解する必要がある。各教科で出される課題や小テスト、補習などが、その教科にとって適量でも、それぞれの教科が同じことをすれば、生徒のやるべきことは山積みとなり消化しきれず苦しむ結果になる。学校は、生徒が生き生きと振る舞える場であるべきだろう。予備校ではないのだから、教師間で競争するのではなく協力する方向をめざしたい。

教科セクト主義、年功序列主義を打ち破る必要を感じる

私たち教師集団のあり方は、一筋縄では語れないが、まずは教科セクト主義を打破する努力が必要だろう。だが、お互い他教科のやり方や評価の方法には口は挟まないし、できないのが現状だ。今、私のクラスに筋ジストロフィー症の生徒がいる。体育祭などで、彼も参加できる集団競技があればと思うが、担当は保健体育科であるし、具体的にどのようなものがよいのか想像もつかないので、口を挟むことはできない。教科間の壁が低く、お互いのスタンスがわかりやすい環境であったなら、なにかよい方策が見つかったかもしれない。また、生徒のところで課題が山積みという状態も避けられるはずだ。

次に、教師の年功序列的思考を外す課題もあろう。例えば、50代後半になると担任を持つことは減るが、代わりに会議の議長に選ばれるなど、役割を年齢によって固定してしまうのはいかがかと思う。若い先生にも議長を、年輩の先生にも担任をというように、お互いを刺激することが活性化につながる。例えば、修学旅行を観光ではなくスキー修学旅行とし、しかも飛行機を利用するというのは、私にはとても考えつかなかった。そのときは、計画した若い先生と協力体制を組んだ。上の指示どおりに仕事をする一般企業と違い、学校では若い先生が企画し年輩の先生がバックアップする方式が可能である。この利点を最大限生かしたい。

生徒を育てるために今後は小中学校との連携も必要だ

今は、昔のように教えるだけでなく、学校生活のルールを身につけさせるのも教師の役割となった。教育の「育」の面は、高校だけで培えるものではない。小中学校との連携を求めて、学校セクトも外していく必要も感じる。

生徒が教師を愛称で呼ぶこともある昨今だが、私は必ず若い先生に対しても○○先生と呼んでいる。教師間の連携はやはり重要な意味を持つ。その連携の基は、責任を持って誠実に仕事をし、仲間から得る信頼であると思う。

大分県立別府青山高校・麻生文吾

生徒に対する統一理解を図る学習会を利用する

基本的に学校という空間は、異なものを排除しがちな、変化を嫌う傾向がある。職員室でも「昨年同様」という発言をついしてしまう。教師集団は基本的に保守的で、行事や会議も例年どおり、形だけになりがちだ。そういう意味では、変化に敏速に対応しづらい集団といえるかもしれない。このような教師が「新教育課程で生徒の質が変わった」とか、「今の生徒は……」など嘆くのだろう。私は、10年も経過すれば、日本の社会も保護者も生徒も、少しは変わっても当たり前だと思う。

教師集団の保守性が急激な変化への敏速な対応の障害に

だが、急激な変化があったなら、生徒の変化とともにその対応に努力する必要があるだろう。変化を嘆く前に、我々教師が柔軟に対応することが重要だと思う。その際、教師集団の保守性は一つの壁となりうる。例えば、学校内で新しい取り組みを実行するとき、いろいろな障害にぶつかることがよくある。それをどう乗りきるか、消極派の反対をどうかわすか、全国の学校の教師が悩み苦しんでいることだろう。

学年団全員での生徒育成の意識を確立したい

本校では、各学年で進路指導学習会を実施している。具体的には、3年生なら学年全員の進路希望調査一覧を見ながら、生徒1人ひとりの進路、学習、生活面などあらゆることについて先生方と話し合う。生徒に対する共通理解を持つことが目的だ。毎週、学級担任会議があるとはいえ、日程の打ち合わせや事務連絡に追われ、限られた時間では満足な情報交換はできない。この会で、個々の生徒に関する情報を交換し自由に意見を出す。複数の教師の意見を聞くことで、担任もいろいろな視点でその生徒について考えられる。

また、進路指導学習会は生徒と教師の有機的な信頼関係を構築することもめざしている。生徒とよい関係を保つためには、まず教師間（特に学級担任間）によい雰囲気を作ることが重要だ。この会で重視していることの一つは、学年団の結束と団結である。ともすれば、担任のスタンドプレー、奇妙なライバル意識に発展しがちな学年団を、この会を通して生徒を中心に据えた絆（きずな）でしっかりとまとまることができる。担任だけではなく、副担任も他学年の教師も巻き込んで実施している。もちろん進路指導担当の私も、3年生の学習会に必ず参加している。「自分のクラスの面倒だけ見ればよい」という考えを捨て、学年の教師全体で生徒全員を育てていくことをめざしている。

加えて、保守的で前任校のやり方が忘れられない教師にも、この会を通して、本校の指導方針をより深く理解してもらうことができる。本校で3年生を卒業させれば、進路指導のエキスパートになれるような運営をしていきたい。そして、この会で学んだことを次の勤務校で役立ててほしいと願っている。

日ごろコミュニケーションをとれない分を、進路指導学習会で補っている面もある。教師間の意思疎通がオープンになれば、新しい取り組みへの意見交換も行いやすい。会は校外でも実施する。終了後は当然、ノミニケーションが待っている。「よく飲む学年は伸びる！」というジンクスも生まれた。

自己満足かもしれないが、なかなかうまくいっていると思う。現在、本校では小論文指導を行っている。この小論文指導についての意見をこの学習会で出し合い、毎年改善を加えている。保守性故に、例年どおりとなりがちな学校社会であるが、この会によって、よりよい意見を採り入れよりよい指導を、という空気が生まれていると思う。

あそうぶんご・昭和34年生まれ。担当科目は化学。進路指導部所属。本校に勤務して、今年で10年目。「おおらかに」を信条としている。

特集 VIEW SPECIAL

教師、かく語りき

近年の生徒の変容と教師のあるべき姿に思う

私が思う学校の課題 4

生徒の気質変化に戸惑う

生徒の気質が変わってきていると実感している先生は多い。「授業に集中しない」「模試の結果に進路希望を左右されがち」「不登校が増えた」などいろいろな声が編集部に届く。全国の先生方が生徒の本質を探る方法を模索中だ。

刹那的な考えの生徒が増え、安易な進路選択が増えた

ここ数年、3年生の担任をして感じることがある。卒業時には、クラスの大半は自分の希望進路を実現する。しかし、そのほとんどが推薦入試を受験し合格した生徒だ。それはそれでよいことではあるのだが、そのため発表が一段落した11月以降、その生徒たちは全く勉強をしない。入試を餌に勉強させるのは間違っているとはいえ、担任としては、11月以降の指導に苦労する。

現実には、なにか目標を持って大学、短大を受けているわけではなく、「合格できればよい」「入れればよい」という生徒が多いような気がする。学校側としては生徒が目的意識を持てるよう、興味づけとなる情報を提供する必要がある。だが、大学や短大側も、学生減に対応するための青田買いのような、定員確保だけのための推薦はやめてほしい、と最近特に思っている。

ゆとりも大切だが、やはり5教科7科目時代を生きた者としては、幅広い知識を身につけ、そのうえで自分の目的に基づいた大学選びをしてほしい。

今の高校生にとって、大学とは、高校とはなんなのだろう？　彼らは日々を刹那的に生きているような気がする。

（広島県）

過去、編集部に寄せられた葉書の意見を一挙に紹介。学校で教師生活を送る中、生徒について、教師について、ほかの先生方はどのように感じているのか。

生き方を考えさせる指導が重要と感じる

進路指導を行ううえで、生徒本人の生き方や考え方を考えない指導は、本来ならありえない。そのような指導を行うには、保護者や家庭の協力は非常に大切であると実感している。受験対策を決して否定はしないが、それだけにとらわれない指導、自分の生き方を考えさせる指導の必要性を感じている。

（京都府）

気になる生徒の希薄な問題意識

意見を持たない生徒が増えている、と感じているのは私だけだろうか。各人の興味の対象や関心が異なるのは当たり前のことで、いくつかのテーマが与えられて、それらすべてのテーマに対して意見を述べたりまとめたりすることは難しいと思う。しかし、なにに対しても特に考えを持たない生徒がめだつ。今の社会では、考えるより先に情報が飛び込んでくるため、思考する機会が著しく少なくなっているのではないか。授業でも試験でもこの傾向を感じる。生徒は考えるより、ノートを写す、暗記する方に興味を示す。

問題意識が、社会をよい方向へ進ませる。私たち教師はあきらめず、考えさせる機会を生徒にどんどん与えたい。

（宮城県）

学ぶ力はあっても意欲がない生徒は生活面でも問題あり

日ごろ授業をやっていて、気になることがある。それは、ノートをとろうとしない生徒は、学ぶ力より意欲の問題が大きいということだ。多くの生徒がきちんと話を聞いて板書を写しているのに、その1人だけがなにもしないでいるというのは、やはり奇異に見える。私の学校では、そうした生徒は「能力があるにもかかわらず」という場合が多い。小中学校で勉強することに疲れてしまって、今は休みたいのかもしれないなどとも思う。しかし、さすがに3年間もそうした姿勢が続くと、やはり本人の学ぶ意欲を疑いたくなる。また、こうした生徒は、だいたいにおいて生活面でも問題が多いと感じる。そのような生徒は「生きる力」をあまり持たないのではと思えてくる。教師はこの力をなんとか回復させようと、必死に働きかける。でも、その力を再び取り戻す生徒は、本当にごくわずかしかいない。それでも「生きる力」をなくした生徒の中に、宝物を見つけようとしている毎日だ。

（栃木県）

教師に対する友達言葉はあらゆる問題の氷山の一角では……

今の学校へ転任してきて、まず驚いたのは、教師と生徒の垣根がないというか、生徒が教師に友達言葉で話しかけてくることだ。前の学校ではなかった。敬語がうまく使えない生徒の多い教室は、床に紙屑が散らばっているなど乱雑であることが多い。友達言葉と教室内の整頓、授業中の私語などは、一連のものなのではないだろうか。

（新潟県）

まず教師が変わらなければ

先生方が一番問題としているのは、日常業務の忙しさであろう。毎日の授業以外に、生徒指導、部活動や行事など、やるべきことには事欠かない。また、教師団の意思統一をどのように図るか、などの問題もあり悩みは尽きないようだ。

一生懸命な人材を現場は求めている。

（東京都）

ほかの教師にこちらから助言をすべきか否か

ふと向かいの校舎を見ると、若い先生が座ったまま話している。その隣の教室では、数人の生徒が散らばって授業を受けている。私は今までの36年間、いすに座って授業をしたことはない。少人数の生徒を教えるときは、前方の座席を指定する。この方が効果的だからだ。だが、アドバイスはお節介と思われそうで、いまだにできないでいる。

（大分県）

試験に部活動、雑用にも追われる多忙さをどうにかしたい

教材研究や考査採点の時間も十分とれず、慌ただしい毎日が続く。さらに体調を崩し、ますます時間に追われることに……。生徒指導より雑用に多くの力を使う。休日も部活動に参加し、もう長く休みをとっていない。この多忙化を止める手立てはないだろうか。

（大阪府）

勉強以外の知識を身につけていない若い教師が多いと感じる

今の若い先生は勉強だけの人が多い。勉強一筋でなければ、採用試験に合格しないからだろう。勉強以外のことを身につける若い人の無限性に期待し、先輩教師が雑学を教える関係を復活させ、ともに成長していければと思う。

（兵庫県）

意欲ある教師の採用を心から望む

教員採用の選考法について審議が進んでいるようだが、ぜひ大いに議論し改善してほしい。頭はよいが、教師の仕事が全くできない人や、仕事を仕事と割りきり趣味に熱中している人などは、どの高校にも少なからずいるだろう。一番大切なのは頭のよさではなく、生徒を思って何事にも真剣に取り組む姿勢だと思う。サラリーマン教師より、少しの欠点があっても、生徒に対して

VIEW SPECIAL 特集

教師、かく語りき

先生のご意見、お待ちしております！
編集部では今月の特集について先生方のご意見・反論・悩みなどをお待ちしています。巻末葉書　またはEメールで編集部までお寄せください。
アドレス：view21@mail.benesse.co.jp